

女性の養蚕から男性の養蚕へ

倉石 あつ子

はじめに

養蚕は近代日本の富国強兵政策に組み込まれ、生糸にして輸出するまでを一貫の流れとして、そこに多くの女性労働力が集約された。その蔭には「女工哀史」などといわれた過酷な労働によって命を落とした女性たちの暮らしもあったし、そこまでいなくても養蚕農家の女性たちの身を削るような労働の日々があった。蚕は「オコサマ」「オカイコサマ」などと呼ばれ、一匹も無駄にしないよう大切に扱って育てられた。繭は出荷すれば現金収入に繋がる貴重な副業の一つであったが、副業というには現金収入に占める養蚕の割合は大きかった。しかし、繭値の下落などにより、平成13年の春蚕・秋蚕・晩秋蚕の合計を見ると、養蚕農家数は全国で2730戸、前年比17%減となっている⁽¹⁾。かつて稲作と並ぶ重要な現金収入源となっていた養蚕も、各農家にとっては既にその役割を終わっているといえる。

つまり、養蚕は農家の生業としては既に終焉状態にあるのだが、養蚕を民俗学的に見た場合、資料の蓄積は多いもののその体系化がきちんとなされているとはいいがたい状況にある。生業の構造として稲作と養蚕とが組み合わされていることは分かっているが、それに関わる労力の配分がどのようなものであったのか、労力と収入の割合は比例していたのかいなかったのかなどが、明確にされないままに調査さえままならない状況を迎えているといえる。また、養蚕にはなぜ女性に関わるのかという点についても、稲作は主たる生業であって収入の多くの部分を占める重要な仕事と認められているために一家の長を中心に営まれ、養蚕はあくまでも副業として行われていたために女性に任されていたのではないか、という見解が概ね了解されているが、本当にそうであったのだろうか。

例えば、長野県松本市近郊の農家では、昭和30年代末頃まで、稲・麦・そば・大豆など現金化できる作物を中心に耕作するほか、養蚕を組み合わせる家が多く、米と蚕が現金収入の二大収入源であった。こうした状況は、松本市だけではなく、日本社会の多くの農家の状況であった。にもかかわらず、稲作があくまでも主体であると考えていたために、養蚕については部分部分に

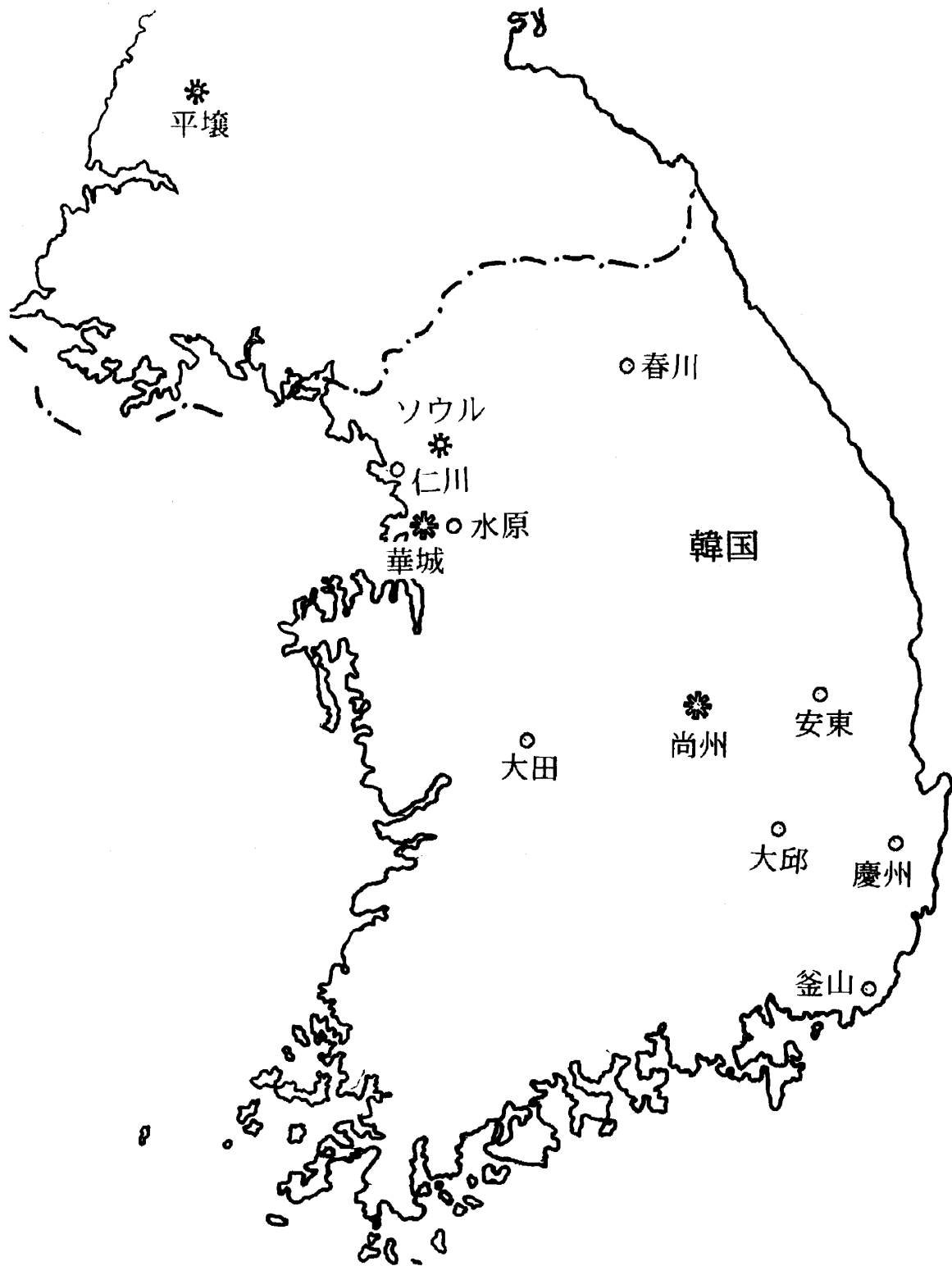
しか目が向けられないことになってしまった。ところが、現在養蚕を行っている農家の収入の割合を見ると、養蚕による収入が多くを占めており、決して副業というような位置づけでは済まなくなっているのである。こうした状況は、韓国の養蚕農家においてより顕著に見られるように思われる。韓国の養蚕も、衰退の一途を辿り現在も養蚕を行っている農家は数えるほどになっており、状況は日本と似ている。本稿ではこうした衰退の一途を辿っているように見える養蚕の中で、生糸や反物としての用途ではなく薬品など別用途として用いられる養蚕に視点を向けて考えてみたい。より現金化と繋がった養蚕は、蚕に対する考え方と共に養蚕の形態も次第に姿を変えつつあり、それは遠くない将来日本でも見られる姿であろうと思われるからである。

1 親蚕式にみる女性の役割

日本において蚕の存在は古くから注目されており、『古事記』上巻には、須佐之男命に奉るための種々の食物を鼻・口・尻などから出したことによって、須佐之男の怒りをかって殺された大気都比賣の頭から蚕が生まれるという記述が見られる。因みに目からは稲種が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰から麦が、尻から大豆が生み出される。つまり、蚕は五穀が生み出されると同時に生み出されたことになっている。蚕神の縁起である蚕影山縁起には天竺長者の娘金色姫が豊良港に流され、上陸した後、蚕に変身していく話が描かれている⁽²⁾。やがて、近世中期から後期になると、養蚕が錦絵として描かれるようになる。そこに描かれている養蚕に携わる人々はほとんどが女性で、それらを見る限り給桑も桑摘みもほとんど女性が主体になって行われていると理解できる描かれ方をしている⁽³⁾。さらに明治期になると地方の神社に、養蚕の豊作を祈願した絵馬が奉納されるようになるが、これらの絵柄も錦絵と同様、ほとんどが長着姿の女性が養蚕に従事している絵柄となっている。明治になってこうした絵馬が奉納されるようになるのは、政府の殖産産業の奨励と大きく関わっているものと思われるが、このへんはもう少し資料を収集し分析していく必要がある。

こうした絵柄の中でも特に重要な意味を持つのは、皇室の養蚕を描いたものである。明治4年明治天皇の後美子皇后が皇居内で養蚕を始めたのが、皇居内ご養蚕所の始まりといわれ、それは現在まで受け継がれている。明治初期に皇后が養蚕を始めたのは、時の政策と無関係ではなく、富国の基本となる殖産産業に皇后自らが率先して携わり、それらが錦絵となって巷に出回ることによって、庶民に養蚕の重要性を印象付けたものと解釈できる⁽⁴⁾。

このように皇族が養蚕に積極的に関わったという例は日本だけではなく、韓国においても同様である。それが顕著に見て取れるのが親蚕式（親蚕礼とも。韓国語ではチャムシルリエというので親蚕礼の方が本来の意味に近いのかもしれないが、近年のパンフレットでは親蚕式となっているのでそちらに従っておく）で、一時途絶えていた親蚕式再現に努力したオ イジュン⁽⁵⁾によれば、「親蚕式はもともと皇后が自ら養蚕の手本を見せ、生糸の生産を奨励した宮中儀礼であった



韓国調査関係地略図

という。檀君朝鮮のころに始められ、三国時代・高麗時代・朝鮮時代を経て伝承されてきたが、国権喪失以後の1924年スンゾンビョ皇后の純絹札を最後に途絶えていた。それを靈鳥43年（1763年）の『チンザムウィグエ』を考証することによって再現することができた。本年度で5回目の親蚕式となる。年（回）を重ねるにつれ、親蚕式の美しさと養蚕の優秀性を発見することができるようになり、これが21世紀の宮廷文化の観光資源として生命力を持つようになったと自負している。」と語っている。親蚕式は、もともと王族たちの住居であった昌徳宮（太宗大王が1405年に建築したといわれる）の書香閣などで行われ、皇后や王妃たちが列席して行われていた。年代が入っていないので正確なことはわからないが、国権喪失と表現している1924年直前ごろの写真には、皇后と王妃たちのほか着物を着た日本人らしき女性や着物に袴をはいた日本人女性も写っている。親蚕式を王族の後たちが中心になって行うことによって、韓国でも為政者から庶民へと養蚕の重要性を訴えていたことがわかる。オ イジュン（イジュン）は上記のような歴史的起源の説明をしているが、実際に養蚕を奨励して庶民に養蚕を勧めたのは世宗大王（1440年代）といわれ、各道ごとに適切な場所を選定して桑を植えさせ、養蚕を大々的に奨励した。また、皇后に命じて親蚕式を行ったり、各道の蚕室をソウル近郊に作ったりした。現在の松坡区蚕室洞がその蚕室のあったところと伝えられている。当時から韓国の農業も稲作と養蚕が基幹とされ、稲作は男性が、養蚕は女性が担当するという役割分担がこの時点で確立していった。そうした役割分担はごく近年まで続いており、水原にある蚕糸科学博物館の資料写真および李根九氏の解説によれば、養蚕において蚕の世話を実際にするのは女性であったことが分かる。たとえば、日本同様一時期農耕図絵に養蚕が描かれていることがあり、そこには桑畑の手入れをする男性と、蚕の掃きたてから上簇までの世話をする女性の姿が描かれており、日本の錦絵や絵馬に見られる構図と同様の構図が描かれている。また、写真には給桑する女性や上簇させる女性がいるが、繭を出荷したり糸の検査を受けるのは男性でそこには女性の姿は見えない⁽⁶⁾。

さて、親蚕式はそうした女性の代表的存在である皇后や王妃の養蚕の姿を今に伝えると同時に文化資源を観光資源として活用する目的で復元されたものであるが、オ イジュンの説明のように文献に基づいた再現であり、多くの部分は忠実に再現されているものと思われる。ただ、1920年代の親蚕式の写真と比較すると、全体に衣装は華やかになり、特に王妃役の女性や宮廷女官たちの髪形・衣装は「見せる」ことを十分に意識したものであることが分かる。

親蚕式復元第1回は南山韓屋村⁽⁷⁾で行ったが、2004年は景福宮（1394年朝鮮王朝の正宮として建立された）を会場に行われているので、会場も含め次第に原型に近い形に再現しようという努力のほどがうかがえる。復元後の親蚕式は、王妃の役を女優がつとめたりしている。王妃が世宗大王に命じられて以降女性たちの仕事として養蚕を行ったように、式では蚕神を拝み（写真1）、蚕に桑をくれて育て（写真2）、上簇させ、繭を収穫し、糸を取るという工程を再現している。2005年の親蚕式も景福宮において11月5日に執り行われた。



写真1 まず、皇后が蚕神を祀るところから式は始まる。
(2004年10月李東漢氏撮影)

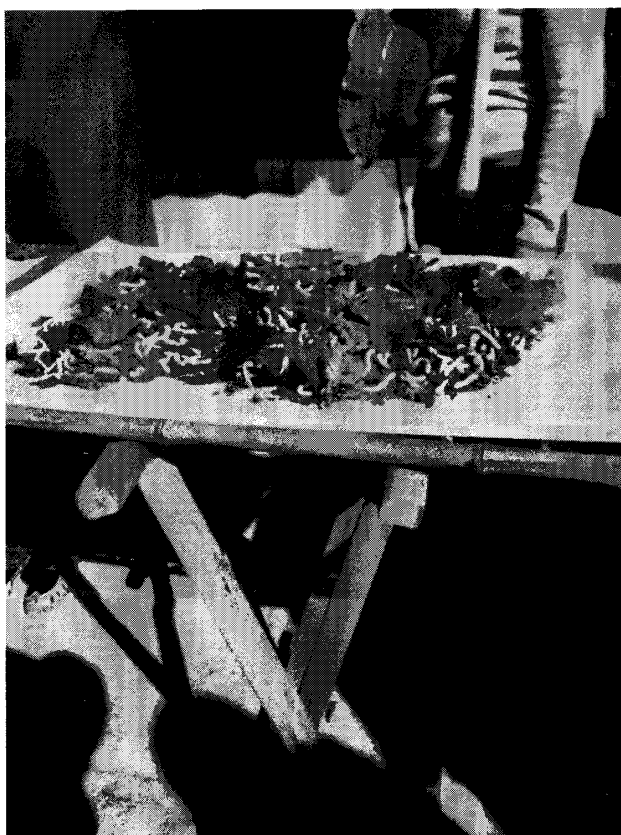


写真2 桑をくれた後の蚕
(2004年10月倉石美都氏撮影)



写真3 親蚕式の見物客
(2004年10月李東漢氏撮影)

しかし、オ イジュンの尽力とソウル市などの後押しによって復元された親蚕式も、実際には養蚕の手本となり養蚕を奨励するような状態にはない。見物客は多く、人が集まっているので観光資源としての役割は今後も果たしていくことは可能だろうが(写真3)、親蚕式を見たから蚕を飼ってみようと思う観光客はいないだろう。ソウル周辺的环境は、既に養蚕を初めとする第一次産業を行うことはほとんど不可能である。また、近郊の農村地帯へ行ったとしても、養蚕を行うような状況にはない。なによりも、蚕に必要な桑畑をほとんど見る事がないからである。つまり、韓国においても養蚕は既に過去のものとなり、桑畑は日本同様、もっと効率的に金が稼げる蔬菜類や果樹栽培などに転換してしまっているからである。

では、かろうじて養蚕を行っている養蚕家の実態とはどのようなものなのであろうか。

2 虫を草に変える養蚕

韓国における養蚕も66年から70年をピークに衰退の一途を辿ったが、農村振興政策の一環として生糸を取らず薬剤の原料とする養蚕に転換することによって、再び養蚕がブームになりつつある。こうして蚕から作られる薬剤の原料を冬虫夏草と呼んでいる。冬虫夏草は昔から不老長寿・強壯剤・韓国の伝統菓子などに入れて使われている。現在は糖尿病や癌にも効くといわれ、また、化粧品などにも使用されるようになってその用途は広がっている。強壯剤としてはバイアグラの向こうを張って、ヌエグラなどと呼んでいる。日本の強壯剤の中にも注意して成分を見ると冬虫夏草が入っているものもあり、使用は韓国だけにとどまらないようである。薬剤の原料となる養蚕は今後ブームになるだろうともいわれているが、農家は全体に高齢化が進み養蚕を行う若い後継者がなかなか居ない状態である。したがって、現在では養蚕を行っている農家を探すのが難し

く、かろうじて三箇所の養蚕を行っている集落を確認することができた。まず、その一つ、慶尚道尚州市功城面鳳山二里の現状について記述してみたい。調査は2003年3月に行い、集落の中のK家に集まった10人余の戸主の方々からの聞き取りである（通訳は当時韓林大学教授の南根祐氏）。

尚州市は安東市から西へおよそ60キロ、人口12万人の地方都市である。新羅時代は全国9州の一つといわれ、朝鮮王朝中期までは慶尚道の政治的な中心地であったが、1592年の文禄の役により日本軍の侵攻を受けて以降、その地位を失ったといわれている。しかし、国立尚州大学をかかえており、この規模の市で国立大学をかかえるのは依然として政治家を多く排出しており、かつての政治の中心地であった名残が伝統として残っているのだろうと説明する人もいる。

尚州市は、近年はりんご・ぶどう・柿の産地として有名で、柿は干し柿として加工し、日本などに輸出している（注意してみると干し柿が尚州市内で売られていた）。もともとは農業と養蚕を基盤とした生業によって生計を立てる地域であった。りんご栽培に入る前は養蚕が盛んで、ほとんどの農家が養蚕を行っていた。1960年代から70年代にかけては、市として100万キログラムの繭を生産していた時期もあり、尚州市内に二箇所の製糸工場をかかえて、全国でも1・2を争う養蚕地帯であった。しかし、現在は果樹への切り替えが進み、ウンチョク面とゴンソン面合わせて70戸余の養蚕農家しか残っていない。りんごはかなりの回数の消毒をしないといけないため、養蚕とは相容れない。そのため、果樹栽培が進むにしたがって、養蚕農家は姿を消していくことになったのである⁽⁸⁾。また、市内二箇所にあった製糸工場も現在は廃業し、跡地には高層アパート・分譲マンションなどが建っている。

こうした尚州市の養蚕現状の中で、二箇所で行っている養蚕の内の一箇所、功城面鳳山二里（ゴンソン面 ポンサンイーリ）では戸数16戸の集落のうち、全戸が現在も養蚕を行っている。養蚕を続けていられるのはこの集落の立地条件によるところが大きい。鳳山二里は標高600メートル近い所に位置する（功城面役場から300メートルほど登った）山の中の村である。この集落の近くに上水道の水源地があり、そのためにこの周辺では農薬を使うことを禁じられている。それが幸いして養蚕が行われているのだという。

日本では、春・夏・秋・晩秋・晩晩秋蚕の5回ほど飼うことができるが、韓国は気候的に春蚕・秋蚕の2回を飼育するのみである。かつては春蚕の残りの桑で夏蚕を飼ったこともあったという。飼い方の手順については、日本と変わらないのでここでは省略するがおよそは以下のようである。

孵化→幼虫になる（蚕になる）→5齢でヒキて繭を作りだす→繭→さなぎ→蛾（交尾）→産卵

種は現在チョンドに一箇所だけ蚕種を扱うところ（蚕種所などという）があり、養蚕協同組合を通して購入する。種の頼み方には次の三種類の方法がある。

- a 種のまま配り家で稚蚕飼育を行う（履き立てから自家で行うということ）
- b 1回寝て起きたものを配布する（1回目の脱皮をしたもの）
- c 3回寝てから届ける（3回目の脱皮をしたもの）

どれを選択するかは、家々で桑の状態や自家の労働力の按配によって決定する。

養蚕協同組合は面内にあり、近所の村の主婦たちを頼んで稚蚕飼育を行う。稚蚕飼育用の桑は飼育所近くにある桑畑を利用する。稚蚕の時が一番手がかかるし、この時期の育て方で後に病気が出たりすることが多いので、稚蚕飼育を依頼する方が違蚕が少ないということである。各家に蚕が来ると、昔は家の中が蚕でいっぱいになり、蚕の収入だけで生活することができた。蚕種は不明だが、白いつやつやした糸が取れる繭を作るものを飼った。繭は製糸工場で購入りにきてくれたり、協同組合を通して出荷したりした。蚕を飼うのは主として女性で、桑摘みは男性の仕事だった。現在は桑の木を切って車に積んで運ぶので、やはり男性が中心になって行っている。桑は、昔は土を掘って倉庫のようなところを作り、そこに保存したが、現在は一日分ずつ切ってくる。

ところで、こうした伝統的な養蚕の仕方が、1995年から変化する。農村振興庁の肝いりで、水原の蚕糸昆虫研究所⁽⁹⁾が製薬剤としての利用方法を開発し、その生産が始まったからである。それが、蚕から作る冬虫夏草である。4眠までは今までの養蚕と同様の過程をたどるが、4眠があげてからが異なる。4眠があげ5齢目に入ると蚕は桑をたくさん食べ、十分に食べると体が透き通り繭を作り始める準備に入る。しかし、冬虫夏草は5齢期（終齢期ともいう）の3日目の蚕にある方法を施し、蚕を加工する。その方法はいくつかあり、急激冷凍する（フリーズドライ）、蒸す、ある菌を吹きかけるなどである。菌を吹きかけたことにより、蛹から茸が生える。この茸が樹氷のように白いところが、韓国の冬虫夏草の特色である。これらの加工法があるが、それぞれは用途によって、あるいは製薬会社の要望によって異なる⁽¹⁰⁾。

これらの加工された蚕は製薬会社に出荷されるが、たとえば急激冷凍した蚕を粉末にして養蚕農家で直売することもある。農業科学技術院発行の冬虫夏草パンフレットによると、同じ冬虫夏草でもいろいろあり、①蚕の冬虫夏草、②中国冬虫夏草、③類似蚕冬虫夏草があり、①と③は学名「ジャポニカ」となっており、蚕の原種は日本種に発しているらしい。

鳳山二里で生産されているものは急激冷凍させたものを粉にするタイプが15戸、冬虫夏草1戸となっている。生産量がどのくらいかは、掃きたての折の箱数で数えるが、2002年の掃きたて数は16戸の合計が、春蚕250箱、秋蚕219箱であった。多い家で31～50箱でこのランクに相当する家は6戸である。平均すると30箱余ということで、養蚕農家としての規模はとくに大きいとはいえないが、日本の農家のどこにでも見られた一般的な規模である。これを飼う桑畑の面積は、合計8.7haで、0.8～1.0haの畑を持つ家は3戸のみなので、他の家はそれ以下ということになる。つまり、蚕の飼育量は桑畑の量に応じた飼育量は勿論のことだが、むしろ労働力や施設の広さな

どと関係しているとみることができる。桑の手入れは男性の仕事で、春蚕のために、秋のうちに桑棒を根面から70センチくらいの所で切っておく。下から三つくらい葉を残して伐るのがこつで、伐る所を間違えると桑が使い物にならなくなってしまふ。春蚕が終わると秋蚕のために地面すれすれの所で桑棒を切る。つまり、桑は同じものを年2回使用するということである。ただ、桑は霜に弱く、90・91年と連続で霜害にあった。そういう年は蚕の掃きたて数を減らすしかない。霜の害を防ぐために桑の根元に籾殻を敷いたり、籾殻を焚いて煙を立てて予防したりする。

こうして飼育製造された冬虫夏草は、製薬会社に売ると1kg50000Wから80000Wになり、今までの伝統的な養蚕に比べて非常に割がいいという。そのうえ、手をかけるのは終齢期の3日目まででよく、一番桑を食べるときの労力が5日分くらい省けることになる。また、一番桑を食べる時期の5日間分の桑も不要であるし、繭をかく手間も要らない。つまり、この生産方法はいいことづくめということになる。糸を取っていた頃は尚州市にある製糸工場から担当のものが買い付けに来たが、その時には行政機関の検査員が必ずついてきて、製糸会社・行政・養蚕農家の三者がそろったところで繭の等級をつけ、等級に見合った値段をつけて買い取っていった。それが1980年代中盤以降、繭の等級のつけ方が厳しくなり、糸の長さによって5等級に分けられるようになった（一つの繭で、糸の長さが2.4キロメートルもある繭もあった）。しかし、飼育に手がかかたり、検査が厳しくなった割には繭値が上がらなかったため、薬剤にする生産方法は養蚕を続けようとする養蚕農家にとって大きな福音となった。

ここでは機械化が進んではいない。飼育のときに棚飼いではなく、放し飼いといわれる方法をとっているが、以下に述べる華城市の養蚕農家に比べると小規模であり、施設的な遅れも目立つ。また、かつては男性が蚕の飼い方などを学んできて家族の女性たちに教え、実際に飼うのは家族の女性たちであったが、現在は男性たちが蚕の飼育に当たっているという。

次に京畿道華城市郊外の養蚕農家H家の様子をK家と比較しながら述べてみよう。華城市は鳳山二里と並び、韓国内で養蚕を行う三箇所のうちの一箇所である。市内に4戸、華城市周辺に5戸の養蚕農家がある。水原の蚕糸科学博物館の李根九氏が模範的な農家とって案内してくれたのが、華城市のH家である。H家は、鳳山二里のK家などと同様現在は冬虫夏草を飼育している養蚕農家であり、韓国内でも規模・質共に優秀な成績を収めている。かつてはこのあたりも養蚕が盛んに行われていたが、繭値が次第に下落し、養蚕では生計が立てられなくなって、養蚕農家は減少していった。加えて、ソウルや水原の市街地に近いため開発も進み、畑地も次第に住宅化したり、養蚕に見切りを付けて野菜栽培などに切り替える農家が続出した。養蚕農家が減少した原因はいずれも繭値が下がったことによるが、その後の変化は地理的条件などにより鳳山二里のあり方とは異なっている。

H家の蚕室は広く（写真4）、片隅には蚕種を保存するための冷蔵庫や孵化させるための温度調節ができる部屋が備えられている。つまり、自家で稚蚕飼育を行い、上簇させる（繭を作らせ

るためではないが) のも自家で行う。それだけ機械が進んでいて、人による労力は省力化されているということである。

H家では、5齢目で特殊な菌を吹きかける方法で冬虫夏草を生産している。5齢の3日目に蚕にヒキル線が出る直前、蚕の表皮に菌を吹きかけると蚕はその菌を摂取し、8日から14日経つと一応薄い繭を作って蛹となる。5齢3日という日が一番いい薬ができる目安なのだという。この時期を過ぎると蚕は1日で40%大きくなるといわれており、大きくなるのに比例して桑も食べるので、冬虫夏草を生産すれば農家にとっては桑もいらずマブシに蚕を入れておけばいいので、労力も桑も少なくて済む。



写真4-A

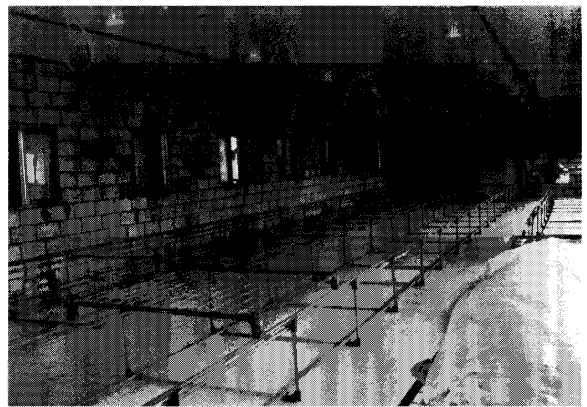


写真4-B

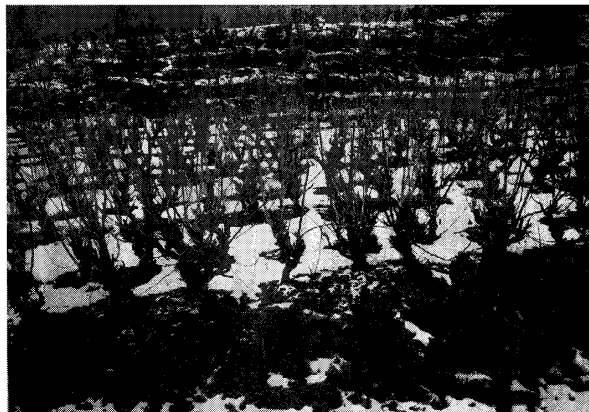


写真4-C

A鳳山二里、B華城市の養蚕施設である。その規模は写真で見ても明らかで、Bの農家の場合、Aのおよそ10倍はあろうかと思われる。なお、Bの天井から垂れている紐は回転チップを吊るすための紐である。Cは鳳山二里の桑畑。春蚕用に桑が仕立てられている。

上簇具にはダンボールでできた回転チップ（回転マブシ）を使用する。チップから繭をはずすのも現在は機械でできるので、かつての繭掻きの時のように人手は必要ない。稚蚕飼育をした部屋に繭から蛹を出して、室温20度、湿度95パーセントにして並べておくと、やがて蛹には茸が生え、茸は樹氷のように白く美しく伸びて冬虫夏草となる。蛹を出した後の繭は真綿にする（蛹を出すために繭は切ってしまうので糸にはならないからである）。真綿はソウルに工場があって、そこで加工している。なお、稚蚕飼育する部屋と冬虫夏草にする部屋が同じでも、次の稚蚕飼育のときに菌が稚蚕に付くことはないのだという。なぜなら、菌は付くものがないとじきに死んでしまうからである。

こうしてできた冬虫夏草は、繭で出荷する値が6000万ウォンだとすれば、8000万ウォンという値段になるので、先述のように労力や桑の消費を含めて考えるとかなり効率がよいということになる。かつては種1箱で繭10キログラムが取れるという収穫量の勘定で、掃きたて数を決めたが現在はどのくらい掃きたてると桑が足りるか、といった自家の桑の量を考えながら掃きたてることになる。もちろん、労力のことも考えなければならない。稚蚕のときは桑の葉っぱをとってこなければならないので、そうしたことも考慮しておかなければならないからである。雨降りのときなどは2日くらい保存しておいた桑をくれることもある。

かつては男性が教育を受けてきて妻に教え、妻が実際には蚕を飼育したが、現在は男性が教育を受け（研究し）、男性自らが蚕と向き合っている。繭を出荷していた頃に比べると、かなりいい金額を収穫後には手にすることができるので、それが励みになって仕事ができるのだとH氏は述べている。どうやら、この方法は違蚕の恐れもないようである。H氏に冬虫夏草を生産する楽しみは何か、と尋ねたところ、「金が儲る」からであるという返事が即座に返ってきた。それ程にこの方法は、魅力的な生産方法であるといえる。

3 課題と展望

以上、述べてきたように韓国では既にかつてあった製糸工場は閉鎖し、絹織物の生産はされていない。絹生地はもっぱら中国からの輸出に頼っているのだという。しかし、K氏が述べているように、確かに養蚕は新しく姿を変えて再び生業の一つとして機能していこうとしているかのように見える。生糸という、国の経済を潤したものとしてではなく、薬品の素材として見直され、既に生産も始まっている。それらの医学的な効果は筆者には分からないが、そうした新たな分野に養蚕が生き残る手段を農家の人々自体が見出そうとしていることも事実である。H氏がいうように「金が儲かる」ことが励みになり、そこに力を注ごうとするのは自然の成り行きである。かつて、養蚕のほとんどの部分が女性に任せられていたものが、現在では男性が自ら関わって飼育している。実際に飼育している時期に見学していないので、細かな部分の分担は不明である。桑を刻んで与えなければならない稚蚕の飼育の折に、かつて女性が関わったように寝る間を惜しみ

我が子を育てるように育てているのかどうかは分からない。また、中国や日本に見られたような孵化の折に女性が自らの体に種をまきつけて孵化させるといった伝承が果して韓国にもあったのかなかったのかはまだ不明である。K氏もH氏もともに、かつては、男性が教育を受け女性に教えて女性に飼わせていたと述べているように、残存資料から見てもつい最近までの生糸を取るためのいわゆる伝統的な養蚕は、ある部分まで女性が大きく関わって行われていたことは明らかである。

しかし、現在、特にH家などでは大掛かりな機械を動かしたり、微妙な薬品の調合噴霧などを行わなければならない、そうしたことが原因となって養蚕の場から女性が後退していつているようである。いわば、養蚕が、飼い方も用途もより工業化することによって、女性から男性へとその主体を移行しているように見える。また、養蚕からかなりの現金収入が得られるということは、家の経営に占める養蚕の位置づけが大きいことを示し、養蚕が副業的な存在から正業的な存在へと変化しているらしいことが分かる。そうした変化とともに、男性が養蚕の中心に置かれるようになったと考えられる。ということは、家の経営の根幹に関わるものは男性が、そこから外れる部分は女性が分担することになるが、家の経済に占める養蚕の割合は依然として不明で、今後詳細な資料に基づく分析が必要である。養蚕が農家に見直されつつあるといわれているが、今後、果たして養蚕農家が増えていくのかも注目する必要があるだろう。鳳山二里などのような純農村地帯では、男性に養蚕を奪われた女性たちは、養蚕に代わる仕事として何があるのだろうか。長い間女性の天職とされ、女性の手になられていた養蚕は、韓国養蚕農家においては、その役割を既に女性から男性の手へと委譲されているかに見えるからである。

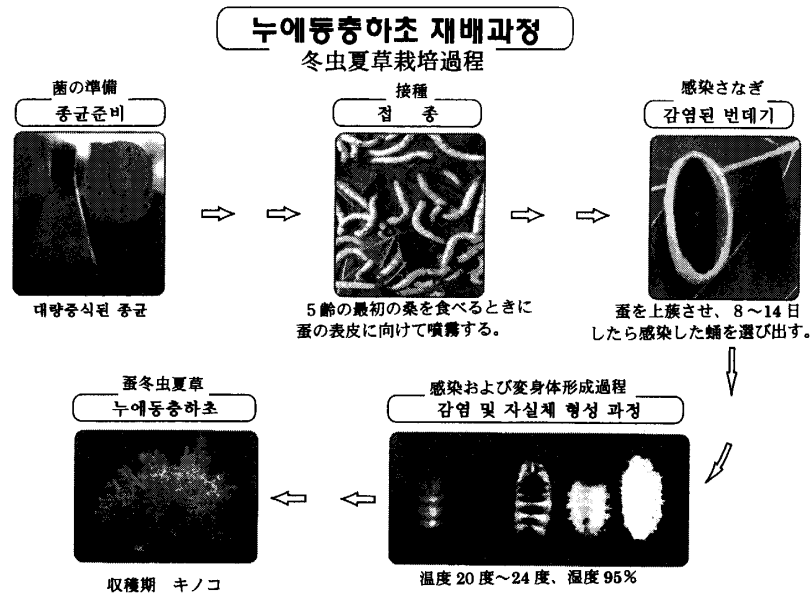
なお、本稿では述べることができなかったが、韓国の養蚕の変遷を辿るときに見落とせないのは、韓国には日帝時代がありこの期間は日本政府の指導によって養蚕が行われていたことである。したがって、その期間に指導された蚕種をはじめ、飼育の技術的な方法、桑の種類や仕立て方、管理の仕方など、一時期、日本流に変化せざるを得なかったものが、その後の養蚕の在り方にどのような影響を与えているのかは日本の養蚕と比較しながら考えてみなければならない問題である。たとえば、日帝時代の蚕種は紙に生ませたものであり、日帝時代が終わってから箱に入ったものが配られるようになったという人もいるように、一時期かなり日本式の方法が主導権を握っていたことが明らかであるが、まだ研究はされていない。養蚕具などにおいても細かな部分を見れば、さまざまな異同が明らかになるであろうことが推測される。

また、鳳山二里では、80年代から90年代にかけて日本の養蚕状況を視察にでかけることがあり、技術交流⁽¹⁾や種の品種改良などを行っていたという。こうした交流が日韓双方の養蚕にどのような影響を与えたのかについても、今後の調査が必要である。

注

- (1) 平成13年12月26日公表 農林水産省統計情報部資料
- (2) 天竺長者の一人娘金色姫は継母に疎まれ桑の葉で作ったうつぼ船に乗せられ流される。豊良湊にたどり着いた姫は土地の老夫婦に助けられ上陸するが、小指ほどの灰白色をした蚕に姿を変える。やがて、頭を上下左右に振り口から細い糸を出して繭を作る。翌日、白い美しい形の繭になり、次の年その繭から出た蛾がたくさん卵を生み、黒い毛蚕が孵った。桑の葉を食べた後、4回の脱皮を繰り返し美しい繭がたくさんできた。日本の国で養蚕を最初に始めたのは豊良で、豊良の小貝浜の小石を蚕棚に供えると養蚕の出来がよいとあって、上州やその他の国の養蚕家は宝物としている。『日本伝説大系』第4巻 124P
- (3) こうした錦絵がなぜ描かれるようになったのかは、未だきちんとした研究がされていない。また、ここでは触れていないが明治期『女大学』などで養蚕は女性の天職と受け取れる記述がされているが、これらとの関係についても今後分析が必要である。
- (4) 若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房 2001年に詳しい
- (5) 韓国生活文化院院長 1962年 宮廷韓服を復元すべく仁寺洞に店をオープン。服の元になるシルクの生産過程に目を向け、親蚕式の再現に尽力している。資料は2004年10月3日に行われた親蚕式パンフレット、本人からの聞き書きによる。
- (6) 韓国の養蚕の歴史については日本語になっている文献はほとんどない。日帝時代、養蚕はかなり日本式の指導を受けたものと思われ、朝鮮総督府の資料を丹念に見る必要があるが、私の作業はまだそこまで進んでいない。したがって、聞き書きによる資料や博物館などが所蔵する資料写真などから読み解くのが現段階での資料収集方法である。
- (7) 南山の北側にソウルに残っていた伝統的家屋5棟を集めて、テーマパークとして新たに設けられた観光施設。「大今昔」など時代劇の撮影場所にも使用されている。
- (8) こうした状態は日本でも各地に見られる。その一つの例として、長野県南安曇郡三郷村の例を『三郷村誌』に取り上げているので参照されている。
- (9) 正式には農業科学技術院 蚕糸昆虫部
- (10) 蚕冬虫夏草栽培過程（農業科学技術院発行の冬虫夏草パンフレットより）

누에동충하초



- (11) 1980年ごろから上簇具としてボール紙の回転チップ（回転マブシ）になった。それまでは藁で編んで作ったというが、作っておくとつぶれたり、場所をとったり、鼠に食われたりするので、上簇直前に作ったものだという。形態は未確認。こうした話を聞くと、養蚕具などにおいても日韓双方で情報交換をしながら改善されたものが多々あることが予想される。

参考文献

- 長野市立博物館『第27回特別展 蚕糸業に見る近代の長野盆地』 1990年
福島県立博物館『天の絹絲一人と虫の民俗誌一』 1998年
群馬県立日本絹の里編『蚕種～近代化を支えた技術の発展～』 平成11年
上垣守国「養蚕秘録」『日本農書全集』35巻 農山漁村文化協会 2001年
成田重兵衛「蚕飼絹篩大成」『日本農書全集』35巻 農山漁村文化協会 2001年
中村善右衛門「蚕統計秘訣」『日本農書全集』35巻 農山漁村文化協会 2001年
石黒千尋「養蚕規模」『日本農書全集』47巻 農山漁村文化協会 2001年
西野古海「新撰女大学」『女大学資料集成』第8巻 大空社 2003年
高田義甫「女訓」『女大学資料集成』第6巻 大空社 2003年
松川半山「女教諭躰種」『女大学資料集成』第6巻 大空社 2003年
(韓国水原市) 蚕糸科学博物館農業科学技術院農業生物部『桑の葉から絹織物まで』 発行年不明(2005年入手)